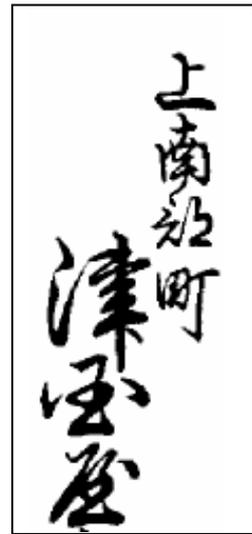


知らないと読めない崩し方

右の古文書は肩書きのところに「上 町」とあるので、住んでいるところのようです。南は、“どのように書かれているかを観察する”と「南」?となるかもしれませんが、部は前回出てきた 部 (郷) よりは崩し方はひどくありませんが、「部」という字です。“そう言われてみるとそんな気がする”くらいでとりあえず十分です。そこで、肩書きの部分は「上南部町」となります。



さて、今回のポイントは 部 という字です。 部 の中に 王 が収まっているという字ですが、 部 は「口(国構え)」の崩しです。これは知っていないと絶対に読めません。この 部 のように、よく出てくる特別な崩しはいくつかあります。そして都合が悪いことに、よく出てくる字に特別な崩しが多いのです。これは、頻出するがゆえに半ば“記号化”していると考えればいいかもしれません。逆に言うと、特別な崩しの字(偏や旁も含む)を一通り覚えると、多くの字が読めるようになるということです。なお、 部 の 部 も「 部 (おおざと)」でよく出てくるくずし字です。

部 に戻ると、「口(国構え)」の中に「王」が入っているので、これは「国」?という仮説が立てられます。その前の字は「津」だということはわかると思いますので、最後の 屋 は何かということになりますが、“どのように書かれているかを観察する”と 屋 という感じになっているので、「厩」「座」「屋」などが連想されます(正解は「屋」です)。

さて、左の古文書の最初の字は「南」(先ほど「南部町」で出てきました)。次の 組 の 組 は「糸偏」です。糸偏と似た崩しに「金偏」があります。 組 は「 組 」という字です。頻出する糸偏と金偏の違いをここで覚えてください。戻って 組 の字は読めたでしょうか。 組 が金偏に「且」ですから、 組 は糸偏に「且」で「組」です。次の 塩 は「土偏」に 旁 は 土 と入って、 塩 と終わっていますから 塩 で、中の字を考えると「塩」?となるかもしれません。 屋 は先ほどと同じで「屋」なので、「南組塩屋町」となります。

